

# 家族と家族幻想 6

坂口 伊都



夫婦になって、間もなく父母になった。子どもが生まれると、自分の時間が持てなくなった。ただひたすら、子どもを育てることに精一杯だった。夫は、母親程には子どものことを真剣に考えているように見えなくてイライラした。

子どもが巣立つ時期に入り、この人と一緒にやっていけるのか不安だった。

3度目の緊急事態宣言が出されました。1年前に初めて出された時のような人流の制限に至らず、5月の末まで延長されました。6月以降もどうなっていくか凶るのは難しいです。80歳代の母親のもとにワクチン接種のお知らせが届いたようで、「1回目はいいけど、2回目に頭痛とか副反応が出るらしい」と接種に尻込みをして、「打たないとあかんかなあ」と聞いてくるので、「打たないとあかんのやるねえ。重症化は防げるみたいだからね」と話をしていたかと思えば、いざ高齢者のワクチン接種予約が始まるとなると、予約が取れないと嘆き、焦り、もう打てないかもと不安がります。母に時期が遅れても、ワクチンを打てるから大丈夫と説明しても耳に入らない様子で落ち着きません。ワクチン接種で、日本中の多くの高齢者がソワソワしているニュースが流れ、落ち着かない高齢者の周りにいる人のため息が聞こえてくるようです。

大学も新学期当初は、オンサイトでの授業が始まりましたが、それも東の間、オンラインに切り替え

になりました。今年度から久しぶりに学部生の非常勤講師を引き受けたのですが、3回目の授業からオンラインに変更になり、Zoomの経験があっても、授業でどう扱うのか勝手がわかりません。何とか、オンライン授業を開くことができても、資料が見られないと学生に言われ、何かもう一つ操作が必要だったのだとわかる始末。こんなスタートですが、オンラインで面白く授業する方法を見つけていこうと思っています。娘の大学では、資料の中にキーワードを入れて、その文字を繋げて課題として提出させる先生がいるそうです。クイズの懸賞みたいです。否応なしの変化に人々は適応しようとし、新たな発見をし、挑戦を繰り返しています。

コロナ禍の中ですが、緊急事態宣言が出る前に初めて夫婦で旅行をしました。新婚旅行も行かず、旅行と言えば必ず子どもや犬を連れてだったので、結婚22年目での初チャレンジとなりました。私達夫婦は、趣味や嗜好が呆れるほど合わず、寝起きの時間も全く違うので、夫婦で旅行に行って同じ時間を過ごせるのか、旅行先で不穏な空気になって終わるのではないかと危惧してしまい、なかなか一步に踏み切れないでいました。大学生の娘を旅行に誘っても、乗り気でない様子が伝わってくるので、ここは夫婦の新たなステージを試すことをチャレンジしました。

お試しということもあり、近場の海鮮が美味しいところを目指すことにしました。よく家族でキャンプをしていたので、上げ膳据え膳も魅力的ですが宿は素泊まりにして、晩御飯は海鮮を入れたバーベキューにしました。旅行中、夫婦で何かすることがある方が、時間を持て余さなくて気が楽かなとも思ったのも大きな理由です。

旅行の日は、娘に犬と猫の世話をお願いして、出発しました。犬は置いていかれることが不服だ

ったようで、しばらく遠吠えをしていたそうです。夫婦二人という身軽さで旅に出て、天候にも恵まれ、桜がお出迎えをしてくれました。遠くから桜が咲いているのが見え、向かってみると地域の人々が楽しそうに花見をしている公園を見つけました。夫婦で「いい所だね」と話ながら、夫は写真を撮り、私は散歩を楽しみました。夫婦旅でなければ、このような展開にならなかったと思います。いつもなら、子どもが喜びそうな場所を考え、選んでいたのですが、無意識に父母の気持ちは後回しにしていたのだと気づきました。

夕食のバーベキューも二人分なのですぐに終わり、波の音を聞きながら焚火を囲みました。家族旅行なら、焚火の周りには夫と子どもが囲んでいたのですが、私は早々に焚火から退散して別のことをしていることが多かったのですが、今回は私しかいません。たまには焚火に付き合ってみようかと思い、焚火の前に陣取ったのですが、煙の向きが頻繁に変わります。その煙から逃げ回りながら、夫に「焚火って、薪を燃やすことが楽しいの？」と尋ねたくなりました。夫によると、次はどこに薪をくべればいいのかと思いつきながら燃やしていくのが楽しいそうです。焚火を囲みながら、温かい飲み物を飲んでいるのも悪くはありませんが、私は夫のようにずっと外にいられず、部屋に退散しました。夫を見ていて、好きなことは苦にならないのだなと改めて感じます。

夫との旅行は、予想以上に穏やかに過ごせました。ここで、家族療法の「サブシステム」を思い出しました。夫の行動にイライラを感じやすかったのは、「両親サブシステム」が働いている時だったようです。私は母親という立場からか、自分の性分か、常に子どものことを気かけながら生活を送り、何事も子どものことを優先的に考えることが当たり前になっていました。一方、夫の方は



自分の好きなことを優先して行動しているように見え、父親としてどうなの？と苛立ってしまいます。夫の行動が子どもにも悪影響を与えているように映ると、私のイライラが止まらなくなりました。改めて私の怒りは、父親なのに自分勝手に無責任な行動をしていると認定しての結果だとわかりました。今改めて考えると、私の方は子どもから目を離すのが下手で、夫の方は子どもを注視することが下手だったのでしょう。お互いに下手な部分ばかりが目についていたようです。家族旅行に行っても、途中で陰湿な雰囲気になっていた理由がわかりました。

この旅行では、「夫婦サブシステム」が働いていました。「美味しそうなお寿司があるから食べないか」と夫が提案すれば、「いいよ」とその提案に乗り、「ここで食べると10%の消費税が取られるけど、持ち帰りなら8%の消費税なら車で食べる？」と私が持ちかけると、それを夫が了承して、どうせなら車の二列目にある備え付けのテーブルを使おうと夫が提案し、いつもは子どもが使っている車のテーブルを始めて自分達が使って、二人で子どもようになったような気分になり、思わず笑ってしまいました。子育てに追われ、親としての責任を背負い、両親サブシステムに比重が大きく置かれた期間、無意識に責任の押し付け合いをしていたのかも知れません。子育てとは、親に重責がかかるものなのでしょう。もちろん、まだ子どもに手がかかって、気楽とは言いきれませんが。

初めての夫婦旅は、気づきとこれからの夫婦の距離感も図ることができたように思います。頭で考えているよりも行動に移してみて、見えるものがあるのだと感じました。そして、両親サブシステムは、夫婦サブシステムを回していくことよりも子どもという第三者が介入して、そこに社会からの評価が繋がる部分が入り難しいのではないのでしょうか。

里親になるということは、社会から里親としてできるのか、できないのかという暗黙の評価を意

識させられる場面も増え、この両親サブシステムを異常に回していかなければならない状況に追いやられる行為なのではないかと感じます。パートナーの親役割にばかり焦点をあてて見えしまうと、常に採点や評価をする視点に偏ります。人の長所と短所は紙一重とよく言いますが、良さが隠されていっていたように思い出します。どのような眼差しをパートナーに向けられるかが大事なのでしょうか。

親は子どもよりも多くの経験をしている。その分、失敗して後悔もしてきた。今なら、あんな失敗しなくて済むのにと感じることもある。

だから、子どもには失敗しないように教えたくなる。子どもからしたら、体験していないことの正解だと提示されても納得できない。その歴史は繰り返されていく。

旅行と言えば、子どもの頃に親からしてもらったことで嬉しかったエピソードは何かと尋ねて、〇〇へ旅行に連れて行ってもらったことがあると答える方がいます。エピソードと聞いているので旅行の中でも、吊り橋が怖くてなかなか進めなかったけど、母が手を引いてくれてゆっくりだけ渡れた等の一場面の答えを待っているのですが、旅行に行った事実だけで答えが終わります。まるで、旅行＝楽しいことという方程式があり、その

中で起きた家族間の関係を考えていませんでした。旅行中でも喧嘩が起きたり、笑いあうような場面があっただろうにと思いますが、出てきません。

旅行＝楽しいという感じは、日常の何気ない家族のやり取りを見ない、取り上げないようにしてやり過ごしているように映ります。そして、日々の生活の中ではできるだけ嬉しい、楽しい、悲しい、辛いというような情動を察知しないようにし、非日常というステージを用意し、強い刺激を与えて初めて起動しているように見えてきます。「特別な場面」という括りと自分の感情は別モノですが、感情を感じないようにしなければ、生きてこられなかったのかも知れません。

家族面接の場でも、家族の関係修復のための処方箋をもらえるのではないかと期待して来られる方がいます。「どうしたらいいですか？」という質問が投げかけられることは多く、そこに何らかの方法を伝えれば、「そうすれば必ず良くなりますか？」や「それをしてもしよくなかったのです」



等が返答されるのでしょうか。家族の関係を何とかしたいと藁をもつかむ気持ちなのはわかりますが、お任せしますという態度を取られると、家族としての責任を放棄しているように映ります。自分で考えることを止めてしまおうとしているのか、あるいは何か行動を起こして失敗することを恐れているのかも知れません。

大人達は子どもに、親や教師の言うことを聞く

ように求めます。大人の人生経験から失敗しない方向に導き、自分と同じような思いをさせたくないという先手を打ちたくなります。「大人の言うことを聞いていけば間違えないから」や何か失敗すると「ほら、大人の言うとおりにしないから失敗するんだ」と言われることも多いでしょう。そこで、失敗を恐れるようになると自分から何か行動を起こすことを避けたいという気持ちが勝るのでしょうか。しかし、そういう大人も自身が生きてきた道のりしか体験していないのです。体験した以外の道のりは、知らないのです。自分の体験を補充するのなら、少しでもいい大学に行き、安定した職場に就職してくれば一安心できるというところでしょうか。子どもが小さな頃ならいざ知れず、大人になろうとしている子どもの行動を親が導こうとしても上手くできるものでもないようです。

子どもが親と違う生き方を望むと、親にとってはわかりにくい、見えにくい世界で将来、子どもが安定した生活を送れる収入が得られるのか、世間から何を言われるかと不安に陥ります。その不安に駆られると、親から見えてわかりやすい世界に子どもを引き戻したくなります。そこで、どのような方法で子どもを応援できるのか否かが、様々な家族の話聞いていて、大きな分かれ道になるのだと感じさせられます。

何が何でも親の描く道を歩かせようと必死になるか、何を言っても言うことを聞かないからとお手上げ状態で放棄してしまうか、心配しながらも子どもを歩ませようとするか。子どもの自主性に任せているからと何もしないのは、自主性の尊重ではありません。親が、現実を見ないようにしているだけです。完璧な親をする必要はありません。子どもにとっても、完璧な親を演じられるのは隙がなく助けてもらおうと思えなくなります。子どもと一緒に考え、悩む親の姿を見て育つ方が子どもは気楽なのではないでしょうか。いくつになっても、悩みはつきません。気楽に生きてみたいと願っていたはずが、日々の生活に変化を感じられな

くなると、どう時間をやり過ごそうかと悩みます。ある程度のストレスが必要だと聞きますし、ストレスと上手くつきあう方法を考えられる方が面白いのでしょう。

**夫婦は、男女であり、父母であり、それぞれ違う役割を持ちながら生活をしている。男女の関係は終わっても、子どもの父母であることは変わらない。**

**子どもは、パートナーとしてではなく、子どもとして親に受け入れてもらいたいものなのです。**

初めての夫婦旅行で、「両親サブシステム」と「夫婦サブシステム」の差を体感しました。サブシステムのことを頭の中で理解していたつもりでしたが、違いがクリアになりました。離婚すると、夫婦サブシステムは終了しますが、両親サブシステムは子どもが自立するまで続きます。対をなす相手と違うシステムを担うことは複雑な関係を担うということで、お互いに子どもを挟み関係を築くという複雑なことをしているのだとわかります。

女性側は養育することで、妻よりも母親の意識が強くなり、男性側は父親よりも夫であることを望み、夫婦の関係が揺らぐという話はよく耳にします。夫婦の間で、どちらのサブシステムを優先させるかの打ち合わせがいるのかも知れません。両親サブシステムばかりを機能させていると、子どもの存在がいなくなることに不都合を感じ、い

つまでも手元に置いておく必要が出てくるでしょう。両親のステージから夫婦サブシステムに移行し、老後に向けての夫婦間の関係構築に向き合う必要があるようです。

単身で子育てをしていたり、夫を頼りなく感じると、子どもに頼りたくなる気持ちはわかりますが、子どもに親のパートナーの役割を求めることを重荷になります。パートナーの役目を果たそうと必死になる子どもの姿を何回も目にしたことがあります。子どもは、親に自分を大好きでいてもらいたいのでしょう。自分を押し殺そう頑張ってしまうようです。夫婦や親としてのあり様を子どもに飛び火させないように心がけようと思います。

